

われている。しかし、注意係数が大きいから
 といって、常にまずい、不適當であるという
 ことではなく、異質な原因は何かなど一応検
 討してみるべきであるという程度の意味である。

- S-P表から、注意係数の高い生徒を2名
 あげてみる。

SNo.13の生徒は、注意係数0.91である。
 事後テストでは14点(93%)を得点し、誤答
 したのは問3(3)だけであった。この誤答した
 問いは事前テストでは正答しており、ケアレ
 スミスのようなものである。このために注意係数の
 値が高く出た。1学期の評定は2であったが、
 学習に意欲的に取り組み、2学期には4にな
 った。

SNo.21の生徒の注意係数は0.63である。事
 後テストの得点は12点で3問正答できなかつ
 したが、この3問のうち2問は事前テストでは
 正答している。むずかしい問題に正答し、や
 や易しい問題を誤ったことが、注意係数の
 値を大きくした。

- 問題についての注意係数(C・P)は、すべ
 て0.4より小さく、異質な得点パターン問題は
 なかった。注意係数の高い問題は、他の問
 題と異質な場合や出題の指示が不明確だった
 場合などが考えられる。なお、出題問題の配
 列は、指導順序に従ったものであり、表3か
 らもわかるように、必ずしも難易度順に配列
 されていない。

③ 前提条件テストと事後テストの結果の考察

前提条件が、学習成立にいかの影響を及ぼすか
 を探ってみよう。そこで、事後テストの得点を前
 前提条件テストのそれと比較し、学習の推移を調べ
 てみた。

この2種類のテストの結果について、それぞれ
 (平均) $\pm \frac{1}{2} \times$ (標準偏差) を境として、得点の度数
 分布をA, B, Cの3段階に分け表4を作成した。
 表の中でA, B, Cの欄のかっこ内の数は得点を
 表している。例えば、前提条件テストのA(25~
 19)は、得点が25~19までをA群としたことを示

表4 前提条件・事後テストの相関

得点区分	前提条件テスト			計
	A (25~19)	B (18~15)	C (14~6)	
事後テスト	A (15 } 14)	B (13 } 11)	C (10 } 2)	
	※ 11 (6, 4, 1)	4 (1, 3, 0)	1 (0, 0, 1)	16 (7, 7, 2)
	5 (2, 3, 0)	9 (2, 7, 0)	4 (0, 0, 4)	18 (4, 10, 4)
	0	0	8 (0, 1, 7)	8 (0, 1, 7)
計	16 (8, 7, 1)	13 (3, 10, 0)	13 (0, 1, 12)	42 (11, 18, 13)

す。また、※欄の数値11は両テストでともにAに属
 する生徒の人数を表し、(6, 4, 1)は11人の内訳で
 (上位群, 中位群, 下位群)に属する人数である。

表4をもとに考察をしてみよう。

- 前提条件になる学習内容が定着してない生
 徒は、事後テストの得点が低い。テスト問題
 が適切に作成されていれば当然のことである。
- 下位群の生徒の伸びが注目される。下位群
 の生徒13名のうち、12名が前提条件テストで
 はCに属しているが、事後テストの結果では、
 その12名のうち1名はA、4名がB、7名が
 Cとなっている。このことは、まだ定着してい
 なかった前提になる学習内容に対してフィード
 バックすることにより、補充治療しつまずきを
 克服した結果によるものと思われる。しかし、
 下位2名については、前提条件が回復されず、
 事後テストでも低い得点であった。この生徒
 に対しては、指導の機会を多くし、働きかけ
 てきたが、更に継続する必要がある。

ここで、前提条件テストの問題とその正答率を
 示し、更に考察を続けていくことにする。